

清水文雄先生著書・論文等目録

年月(日)	題	誌名及び書名	発行所
昭和四年	子規に於ける和歌革新の第二段	国漢文叢書(五)	星野書店
昭和七年	和泉式部集の歌と和泉式部日記	文学	岩波書店
昭和八年	和泉式部正集の形態に関する研究	国文学試論(一)	春陽堂
昭和九年	能因の奥州行脚	文学	岩波書店
六月	新資料能因法師集の研究	国文学試論(二)	春陽堂
十一月	和泉式部正集の成立	国文学放(一)(二)	大島文理 大医語国 文学会
十二月	国文学試論 批評篇 第一輯 (池田勉・蓮田善明・栗山理一と共同執筆)		春陽堂
昭和十年	和泉式部日記考	国文学試論(三)	春陽堂
昭和十一年			
八月	国文学試論 批評篇 第二輯 (池田勉・蓮田善明・栗山理一と共同執筆)		春陽堂
九月	斎藤茂吉著「柿本人麿」総論 篇 鴨山考補註篇」(書評)	国文学放(二)(二)	大島文理 大医語国 文学会
昭和十二年			
四月	原典批評の可能性	文学	岩波書店
七月	道綱の母	国文学試論(四)	春陽堂
十月	物語性の深化	国文学放(三)(二)	大島文理 大医語国 文学会
昭和十三年			
二月	宣長の物語論に關聯して	古典研究	雄山閣
六月	物語の形成——和泉式部日記を中心として	国文学試論(五)	春陽堂
七月	対詠精神	国文学放(一)	大島文理 大医語国 文学会
七月	西下経一著「日記文学」(書評)	国文学放(二)	大島文理 大医語国 文学会
八月	土佐日記序章	国文学放(三)	大島文理 大医語国 文学会
九月	垣内教授「基本語彙学」(書評)	国文学放(四)	大島文理 大医語国 文学会

十月 雪鳥遺稿「修善寺日記」
(書評)

文芸文化
の会

十二月 公任卿集覽書

文芸文化
の会

十一月 日本的発想——中河与一
「天の夕顔」(書評)

解釈と鑑賞
至文堂

昭和十六年
一月 能因法師伝(その一)

文芸文化
の会

昭和十四年

一月 王朝発想の地盤——曾禰好忠
序論

文芸文化
の会

四月 能因法師伝(その二)

文芸文化
の会

二月 相聞

文芸文化
の会

四月 保々君のこと

ありし日
の面影

三月 みやび(風流論討究 第五稿)

文芸文化
の会

七月 和泉式部日記(岩波文庫)

岩波書店

四月 岡山巖著「短歌鑑賞論」(書評)

文芸文化
の会

昭和十七年
一月 韃靼漂流記(新文庫)

春陽堂

六月 古今集の花の歌

文芸文化
の会

一月 和泉式部日記の作者について

文芸文化
の会

八月 「かげろふの日記」について——
作者堀辰雄氏へ

文芸文化
の会

二月 式子内親王(一)

文芸文化
の会

十月 更級日記(一)

文芸文化
の会

三月 海ゆかば——歴代愛国和歌集(新文庫)

春陽堂

十月 文芸的方法——「うひ山ぶみ」序論

国語と国文学
至文堂

三月 式子内親王(二)

文芸文化
の会

昭和十五年
十二月 憧憬の姿勢——更級日記(二)

文芸文化
の会

四月 式子内親王(三)

文芸文化
の会

昭和十五年

一月 二つの心——更級日記(三)

文芸文化
の会

五月 式子内親王(四)

文芸文化
の会

三月 作家の生成——更級日記(四)

文芸文化
の会

七月 式子内親王(五)

文芸文化
の会

七月 女流日記(文芸文化叢書)

子文書房

八月 祝詞にかへて——伊東静雄氏へ

文芸文化
の会

九月 言靈のしらべ

文芸文化 日本文学の会

十二月 衣通姫の流(八)

文芸文化 日本文学の会

九月 詩人の声

文芸文化 日本文学の会

昭和十九年

十二月 「十二月八日」以後

輔仁会雑誌 学習院輔仁会 (一六八)

一月 衣通姫の流(九)

文芸文化 日本文学の会

十二月 桜島

文芸文化 日本文学の会

二月 衣通姫の流(一〇)

文芸文化 日本文学の会

昭和十八年

一月 衣通姫の流(一)

文芸文化 日本文学の会

二月 一人

文芸文化 日本文学の会

一月 大君の辺にこそ死なめ

文芸文化 日本文学の会

三月 衣通姫の流(一一)

文芸文化 日本文学の会

二月 衣通姫の流(二)

文芸文化 日本文学の会

四月 然れども言筈ぞ吾がする

説書人 東京堂

三月 衣通姫の流(三)

文芸文化 日本文学の会

六月 跋にかへて

蓮田善明著「忠誠心とみやび」(ラジオ新書) 出版協会

四月 衣通姫の流(四)

文芸文化 日本文学の会

八月 衣通姫の流(一二)

文芸文化 日本文学の会

五月 中古女流作家論

日本文学論 大系(五)

十一月 神の道

国文学叢話 青磁社

五月 衣通姫の流(五)

文芸文化 日本文学の会

二月 万古

文芸世紀 文芸世紀社

五月 神遊び

文芸文化 日本文学の会

三月 枕詞

多磨 多磨短歌会

六月 衣通姫の流(六)

文芸文化 日本文学の会

昭和二十二年

をだまき (二六の九) 社 をだまき

七月 衣通姫の流(七)

文芸文化 日本文学の会

十月 歌論(一)

をだまき (二六の九) 社 をだまき

八月 歴史

文芸文化 日本文学の会

昭和二十三年

文学探究 創刊号 文庫

九月 山頂に日の大神を迎ふ

文芸文化 日本文学の会

九月 「やまかは」と「新月」(書評)

文学探究 (二ノ二) 文庫

十月 生死の問題

十一月 正岡子規

十一月一日 はじめに——日本文学への道 (二)

十二月 日本文学 風土と構成——久松潜

一先生へ(書評)

十二月一日 国しぬび歌——日本文学への道 (二)

昭和二十四年

一月 和歌世界

一月一日 枯野の琴——日本文学への道 (三)

二月一日 和奈佐少女——日本文学への道 (四)

三月 和歌世界の構造序説

五月五日 東宮さまをお迎えして——誕生日のことなど

十二月

中学作文・ことばの生活(一・二・三) (齋藤清衛・池田勉・栗山理一・高藤武馬と共編)

昭和二十五年

一月五日 志貴皇子の歌——名作鑑賞(一)

文学探究 (一) (三)	いつくし 文庫
文学探究 (二) (四)	いつくし 文庫
国語通信 (三)	会 廣島教育 図書刊行
文学探究 (二) (五)	いつくし 文庫
国語通信 (五)	会 廣島教育 図書刊行
文学探究 (二) (一)	いつくし 文庫
国語通信 (七)	会 廣島教育 図書刊行
文学探究 (九)	会 廣島教育 図書刊行
文学探究 (三) (二)	いつくし 文庫
国語通信 (一三)	会 廣島教育 図書刊行
国語通信 (二九)	いつくし 文庫

二月 世代の谷間

二月五日 新しい詩のかどで——名作鑑賞 (二)

五月 「有心」について

七月 二十才のエチュード

昭和二十六年

三月二日 最大の贈物

六月 蓮田善明のこと

六月 文学的感想

七月 ほるとがる文

七月 読書漫筆

昭和二十七年

一月 業平的と芭蕉的

二月 青春の混沌について——渠立ちゆく若き友へ

六月 歌に憑かれた青春

はたち 創刊号	廣大東雲 分校学友 会文芸部
国語通信 (三二)	廣島教育 図書刊行 会
祖 国 (三二)	祖 国 社
はたち (二)	廣大東雲 分校学友 会文芸部
中国新聞	中国新聞 社
日本談義	日本談義 社
青 炎	青 炎 の 会
廣島大学 東雲新聞	廣大東雲 分校新聞 部
読書ノ一 創刊号	廣大付属 図書館東 雲分館
国文学攷 (二〇) 復刊号	廣島文理 大学国語 文学会
はたち (四)	廣大東雲 分校学友 会文芸部
読書ノ一 (三)	廣大付属 図書館東 雲分館

七月 中学校国語科用・ことばの生活
 文学の本(一)・二・三(三年)
 言語の本(一)・二・三(三年)(東条
 操・斎藤清衛・池田勉・栗山理一
 ・高藤武馬と共編)

七月 「わかたけ」のごとく

昭和二十八年

七月 挽歌

十月 断絶と架橋

十二月 明日の女性の運命
 十八日

昭和二十九年

二月 五木の子守唄(随想)

五月 断絶と架橋―「桃の会」に寄す
 六月 日本の表情
 (ペンフレット)

七月 Y氏への手紙―「薫の憂愁」
 ということにふれて

七月 孤島の若者―「潮騒」の作者
 三島由紀夫へ

十一月 読解力を高めるには―小説
 の場合

昭和三十年

東陽書籍
株式会社

詩集「わかたけ」
多郡中野
小学校

祖国伊
東静雄追
悼号
祖国社

はたち
(五)
分枝国語
研究室

中国新聞
社

読書ノ
ト(五)
図書館東
雲分館

桃創刊号
桃の会
東陽書籍
株式会社

ことばの生活
(ペンフレット)
はたち
(六)
分枝国語
研究室

読書ノ
ト(六)
図書館東
雲分館

国語科中学
教育技術
小学館

二月 和泉式部ノート

三月 班女の扇

五月 伝行成箴和泉式部集切について

七月 「橋」に寄せて

昭和三十一年

三月 和泉式部歌集(岩波文庫)

三月 和泉式部の歌

三月 伊東静雄断想―記念樹に寄せて

八月 和泉式部日記の成立

十月 植樹の銘

十月 らきもあはれと―和泉式部
ノート(一)

昭和三十二年

二月 歌まなび―王朝的教養序説

四月 斯波博士の最終講義を聴く

五月 論文はどのように評価されるか

八月 和泉式部日記の一節

八月 言語生活への反省―「をりふし
・きりめ」論

桃の会

はたち
(七)
分枝国語
研究室

国文学攷
(二四)
国文学会
国語の会

橋創刊号
国語の会

岩波書店
岩波書店

文庫
岩波書店

はたち
(八)
分枝国語
研究室

解釈と鑑賞
至文堂

東雲同窓
会

バルカノ
ン創刊号
火の会

広島大学教
育学部紀要
第一部
学部

尙志
(一九)
尙志会

賞
至文堂

文庫
岩波書店

国語通信
(五)
筑摩書房

十月 王朝日記——日本古典鑑賞講座

(六) 白田基五郎・阿部秋生
・松村誠一と共編

十月 燈籠流し・その他——和泉式部
ノート(二)

昭和三十三年

四月 偶感

五月 国文学——国語教育のための諸学

五月 和泉式部日記私注(一)

六月 和泉式部日記私注(二)

六月 山本修大人を悼む

七月 「をりふし・きりめ」の論

八月 和泉式部日記私注(三)

八月 対談・日本浪漫派とその周辺——
保田与重郎氏と

八月 序にかえて

九月 和泉式部日記私注(四)

十一月 和泉式部日記の一節——「はかな
きこと」にふれて

十一月 花をしみれば——和泉式部ノート
(三)

昭和三十四年

一月 思つこと

角川書店

バルカノ
火の会

橋(二)
広大東雲
国語の会

国語教育
科学講座
明治図書
出版株式
会社

天魚(三)
昭英社

天魚(四)
昭英社

風日(五)
風日报社

国語教育
の体系
(研究集
録)
全国国語
教育研究
協議会
野大会
長

天魚(五)
昭英社

バルカノ
火の会

バルカノ
佐藤秀山
著「あゆ
み」

天魚(六)
昭英社

国文学叢
(二〇)
国文学会

バルカノ
火の会

河創刊号
王朝文学
の会

四月 岩つつじの歌——和泉式部ノート
(四)

五月 高等学校用国語(乙)・古典(一)
・二・三年(高藤武馬と共編)

七月 はかなきこと——和泉式部ノート
(五)

十一月 河三題(随想)

昭和三十五年

五月 伝行成筆和泉式部集切の二三につ
いて

六月 浜藤の花——亡友蓮田善明を憶う

九月 花のひらくように

十月 前田さんのこと

十二月 和泉式部

昭和三十六年

六月 「聞くこと」の意義

十二月 父と子

バルカノ
火の会

バルカノ
火の会

バルカノ
火の会

学校教育
内学校教
育研究会

国文学叢
(二二)

不死鳥
創刊号

近代文学
研究(一)

近代文学
研究(二)

尙志(三一)

日本歌人
講座(二)
中古の歌

弘文堂

学校教育

学内校教
育研究会

学内校教
育研究会

学内校教
育研究会

学内校教
育研究会

昭和三十七年

三月 三島由紀夫の手紙

三月 河畔にて

四月 門出の日のために

四月 高等学校・現代国語(一)(新村出・興水夷・高崎正秀・中田祝夫・前野直彬・山本健吉と共編)

四月 高等学校・新選古文(一)(新村出・興水夷・高崎正秀・中田祝夫と共編)

四月 高等学校・新選古典(新村出・興水夷・高崎正秀・中田祝夫・前野直彬と共編)

五月 和泉式部日記成立に関する小考——いはゆる「原歌集」をめぐる

五月 つれづれの年輪

六月 大橋清秀氏著「和泉式部日記の研究」について(書評)

六月 河畔にて

七月 兼行の眼

新日本文
学全集
月報(二)

集英社

河(二)

王朝文学
の会

広島大学
教育学部
学生新聞

広大教育
学部学生
自治会

尚学図書

尚学図書

尚学図書

国文学
会(二八)

広大
国語
学会

土井忠生編
「徒然草学
習指導の研
究」

三省堂

平安文学
研究(二八)

平安文学
研究会

バルカ
ン(一八)
国語
しま
ひる

広島市小
学校
国語
教育
研究
会(八)

八月 古典語ノート(一)

九月 日記の中から

九月 「桃」の共鳴圏

十一月 「安法」「恵慶」「玄々集」「能因」「能因歌枕」「能因法師集」等の執筆

十一月 古典語ノート(二)——「語る」から「語らふ」へ

十二月 古典語ノート(三)——「つれづれ」の源流

十二月 藤村詩集

昭和三十八年

二月 遠藤嘉基著「新講和泉式部物語」(書評)

五月 古典語ノート(四)——「つれづれ」の源流?

五月 うづく女のいのち——女流五人歌集「海の琴」を読んで

七月 浜木綿と時鳥

国語教育
研究会
広大教育
学部光葉
会(四)

河(三)

王朝文学
の会

桃百号
記念号

明治書院

和歌文学
大辞典

広大教育
学部光葉
会(五)

国語教育
研究(六)

広大教育
学部光葉
会(六)

近代文学
研究(三)

広大教育
学部近代
文学研究
会(三)

国語と国
文学

至文堂

国語教育
研究(七)

広大教育
学部光葉
会(七)

中国新聞

中国新聞
社

河(四)

王朝文学
の会

清水文雄先生略年譜

明治三十六年（一九〇三） 当歳

六月六日、三代太郎長男として熊本県球磨郡五木村の川辺川（球磨川支流）の畔に生まれる。母はチカ、山広氏。他に一弟三妹があった。父の本籍は広島県比婆郡西城町、同町の呉服商清水民吉没して嗣がなかったので、岡本家より入って家督を継ぐ。しかしその家業は襲わず、生家相伝の鍛冶を生涯の業とする。出先の五木は当時銅山の所在地として知られていた。

同 四十一年（一九〇八） 五歳

母の喪家のある広島県安佐郡深川村（現在の高陽町）下深川に一家を挙げて転住、やがて本籍もここに移す。

同 四十三年（一九一〇） 七歳

四月、深川尋常高等小学校入学。

大正五年（一九一六） 十三歳

三月、同校尋常科卒業。四月、高等科入学。家業を手伝いながら通学する。

同 六年（一九一七） 十四歳

十二月二十九日、幼時愛撫してくれた祖母キサ（故民吉妻）の死に逢う。享年八十五歳。

同 七年（一九一八） 十五歳

三月、深川小学校高等科卒業。四月、同校併設農業補習学校（夜間）入学。昼間は父を助けて家業に従うかたわら、大日本国民同学会の講義録によって独学する。その付録の月刊雑誌「新国民」に短歌・詩・小品文などを投稿し、孤独をまぎらすとともに、漸次文学への眼を開かれる。選者に金子藺園・生田春月・加藤武雄らの諸氏がいた。ほかに「文章倶楽部」や「中国新聞」にも短歌・俳句などを投稿した時期もある。

同 十一年（一九二二） 十九歳

三月、補習学校の恩師久都内勝齋先生の勧めにより、広島市所在私立山陽中学校併設城南中学（夜間）第三学年に編入、三里半の道を自転車に通学する。当時芸備線はまだ開通していなかった。

同 十二年（一九二三） 二十歳

九月、両親の同意を得て、山陽中学校（昼間）第四学年に編入、同時に家を離れて広島市内に住むことになり、夜間働いて自活の道を講ずる。編入・就職については、夜学時代以来の恩師玉置哲二・林茂敏両先生の厚情を蒙った。この年、徴兵検査により第二乙種合格。

同 十四年（一九二五） 二十二歳

三月、山陽中学校卒業。四月、広島高等師範学校文科第一部入

学。以後、鈴木敏也・莊田安太郎・齋藤清衛（以上国語国文）、北村沢吉・武藤長平・後藤俊瑞（以上漢文）諸先生の薫陶を受ける。
昭和二年（一九二七） 二十四歳

五月八日、末広家に嫁いでいたすぐの妹琴代二児を遺して死去。
享年二十二歳。夏休暇に入り、広島高師山岳部がその発会式を立山頂上で挙げるのに加わり、山への関心頓に深まる。

同 四年（一九二九） 二十六歳

三月、高師卒業。在学中、校友会雑誌「曠野」、同人雑誌「文芸陣」「耕人」などに寄稿し、またそれらの編集にも携わる。卒業論文は「正岡子規における和歌革新の第二段階」（指導教官、齋藤先生）。四月、新設の広島文理科大学（国語国文学専攻）入学。以後、鈴木敏也・東条操・土井忠生諸先生の指導を受ける。

同 五年（一九三〇） 二十七歳

十二月三十日、父を喪う。享年六十七歳。

同 六年（一九三一） 二十八歳

広島勸重隊に幹部候補生として在営中の松田武夫氏によって池田龜鑑先生に近づく機会が恵まれる。池田先生からは主として文献学的研究の対象や方法について指導を受け、さらにそれを機縁として松尾聰・鈴木知太郎・岸上慎二その他池田先生周辺の諸氏とも交誼を結ぶに至る。

同 七年（一九三二） 二十九歳

三月、文理大卒業。卒業論文は「和泉式部集の研究」（指導教官、土井先生）。同月、児玉房枝と結婚。四月、成城学園成城高等学校（七年制）尋常科教諭として赴任。居を東京府北多摩郡千歳村船橋（現在の東京都世田谷区船橋町）一八四に定める。五月

十五日、いわゆる五・一五事件勃発。九月、東条先生学習院教授となられ、一家を挙げて上京されるのを迎える。

同 八年（一九三三） 三十一歳

三月二十一日、長女みを生まれる。四月、齋藤先生高師教授の職を退かれ、全国行脚の旅に出られる。五月、成城学園小原国芳校長の退任問題が、学園挙げての騒動に発展し、教師としての立場で苦悩する。九月、齋藤先生上京、北多摩郡千歳村下祖師ヶ谷（現在の世田谷区祖師ヶ谷二丁目）に独居自炊の生活を始められる。同月、池田勉・蓮田善明・栗山理一と共に同人研究概要「国文学試論」第一輯を春陽堂より刊行。以後、十三年六月刊の第五輯に及ぶ。試論発行に際しては、当時、春陽堂在勤中の高藤武馬氏の好意による所大であった。これを機に同氏との交遊はじまる。十一月高等科教授となる。

同 九年（一九三四） 三十一歳

四月、下祖師ヶ谷に転居。七月三十日、二女あさ生まれる。十二月、「国文学試論批評篇」第一輯を春陽堂より発行、同人の共同執筆で、業績検討「岡崎義恵氏の歩みについて」その他を載せる。

同 十一年（一九三六） 三十三歳

二月二十六日、いわゆる二・二六事件勃発。三月三日、三女は生まれる。四月、欧米旅行に出発される齋藤先生を東京駅頭に送る。八月、「国文学試論批評篇」第二輯発行、同人の共同執筆で、業績検討「齋藤清衛先生に捧ぐ」その他を載せる。同月、池田・蓮田・栗山と高野山（遍照光院）に籠り、齋藤清衛編・星野書店刊「作文」（中学校用）の編集を分担する。この頃、コギト同人伊東静雄氏と相識る。その後同氏を介して、同じくコギト同人

の保田与重郎・田中克己・中島榮次郎その他の諸氏にも接近する機会を得る。

同 十二年(一九三七) 三十四歳

七月七日、芦溝橋事件を契機として日支事変勃発。八月、昨年に引き続き高野山に籠り、「作文」(女学校用・実業学校用)の編集を分担する。

同 十三年(一九三八) 三十五歳

三月三十一日、成城高校退職。四月一日、学習院講師嘱託。恩師東条先生の推輓による。当時院長は海軍大将野村吉三郎氏であった。中等科二年に平岡公威(後の三島由紀夫)少年が在学していた。この月、蓮田、台中商業学校より成城高等学校へ転任。七月、上記同人四人で「日本文学の会」を結成し、月刊雑誌「文芸文化」創刊。雑誌創刊については、垣内松三・西尾実・齋藤清衛・久松潜一諸先生より貴重な助言をいただく。同月二十八日より三十一日までの四日間、高野山において「日本文学の会」主催で日本文学講座を開き、講師として東京から 垣内・齋藤・久松三先生、京都から源豊宗先生を招く。八月一日、学習院教授となる。十月、同人の予備歩兵少尉蓮田善明応召、郷里熊本歩兵第三十四聯隊に入る。

同 十四年(一九三九) 三十六歳

四月、蓮田、中支戦線に赴く。八月一日、長男宏輔生まれる。十月、野村院長外務大臣として転出のため、同じく海軍大将山梨勝之進氏新たに学習院長となる。

同 十五年(一九四〇) 三十七歳

四月、新設の学習院中等科三年寄宿舎(青雲寮)舎監を命ぜられ、豊島区目白町二丁目一〇五七の官舎に転居。同月、池田、大

阪府立今宮中学校より法政大学予科へ転任。十二月、蓮田帰郷、郷里で所労を養う。この年、齋藤先生国立北京師範大学教授とされる。またこの頃、板画家棟方志功氏と相識る。

同 十六年(一九四一) 三十八歳

二月一日、二男伸二郎生まれる。この月、蓮田、上京帰任。十二月八日、大東亜戦争勃発。

同 十七年(一九四二) 三十九歳

五月、齋藤先生京城帝国大学へ転任。八月、栗山、大阪府立堺中学校より眞亜工業大学(東京)へ転任。以後、同人四名揃って在京、雑誌「文芸文化」を中心とする編集および執筆に相携えて力を致す。またこの頃、同人連れ立ってしばしば佐藤春夫先生の門をたたく。

同 十八年(一九四三) 四十一歳

三月十日、三男邦夫生まれる。十月、蓮田再度の応召、予備陸軍中尉として熊本の一部隊に入り、間もなく南方戦線に赴く。

同 十九年(一九四四) 四十一歳

三月、家族を本籍地に疎開させ、同じく家族を長野に疎開させた栗山の好意により、その宅(世田谷区大蔵町一八七一「現在の砦町一一一」)に移る。八月、雑誌統合の政府要請を機に、第七十号をもって「文芸文化」終刊。十月、新宿区下落合一丁目三〇六、学習院昭和寮に転居、自炊生活に入る。今年後半に入り、戦局、いよいよ苛烈となり、学徒動員により教え子相次いで出陣するを送る。

同 二十年(一九四五) 四十二歳

三月、帝都の空襲ようやく激しさを加えてきたので、学習院中高等

科も疎開に踏み切る。同僚三名とともに、中等科一年生約八十名を引率して栃木県日光町に疎開、金谷ホテル別館を借りて四月から授業を始める。初等科はすでに同ホテル本館で授業を行なっており、東宮殿下・義宮殿下も御用邸から通学されていた。四月十三日夜、帝都の大空襲により、学習院も木造建築の大半を焼失。五月十五日、母を喪う。享年六十七歳。八月六日、敵の投下した新型爆弾(後日原子爆弾と判明)による広島全滅の報に、家族の上が案じられる。同月十五日正午、金谷ホテル前庭で、学生全員と共に終戦の詔書の放送を聴く。斎藤先生は折柄休暇帰京中であつた。十月、日光学習院閉鎖帰京。十一月、静岡県沼津市桃郷学習院游泳場に改めて沼津学習院開設、日光に引き続き中等科一年生のために授業を行なう。十二月九日、恩師鈴木敏也先生逝去。

同二十一年(一九四六) 四十三歳

二月、沼津学習院閉鎖帰京。四月、東京都北多摩郡小金井町(現在の小金井市)の元文部省研修所の建物を校舎として、学習院小金井校が充足し、その専任となる。今春初等科御卒業の東宮殿下を迎えて、とりあえず中等科一、二年のために開かれた学校である。五月、斎藤先生広島文理科大学教授となられる。六月二十日、蓮田夫人敏子氏より来信、「昭和二十年八月十九日マレー半島ジョホールバルにて蓮田中尉自決」の公報ありし旨を告げる。七月十九日、四男明雄生まれる。九月五日、小金井町是政二三五九の官舎に移る。同月二十九日、学習院小金井校寄宿舎(光雲寮)開設、その舎監を命ぜられる。東宮殿下も一寮生として、特別の場合を除き、毎日放課後就寝時まで、一般寮生と生活を共にされることとなる。十月五日、山梨氏学習院長を込ぎ、安倍能成氏

新たにその職に就く。十月十日、信州疎開中の佐藤春夫先生より来信。蓮田亡き後の同人三名を激励する詩をいただき感動する。同月二十九日、東宮殿下の家庭教師としてアメリカより迎えられたヴァイニング女史、中等科一年の授業の一部をも担当することとなり、はじめて来校、全学生に紹介される。その直後、持病胃療養の激しい発作に逢う。十一月十七日、成城学園素心寮において、故蓮田善明追悼会を催す。会者は、桜井忠温・中河与一・阿部六郎・今田哲夫・三島由紀夫の諸氏に同人の池田・栗山・清水を加えて、計八名。

同二十二年(一九四七) 四十四歳

三月三十一日、学習院が民間経営となり、改めて私立学習院教授に補せられる。敗戦による周囲の状況の急変に伴う精神の不安に堪えず、郷里の山河の間に身をおいてしばらく安息の時を持ちたい、という切なる欲求から、四月三十日、意を決して学習院を退き広島県に帰住することにす。帰郷の心のなかには、原子爆弾で廃墟となった、青春の故地広島への愛惜の情もまじっていたようである。五月二十五日、広島師範学校長辻幸三郎先生(高師時代の恩師)の恩命により、同校講師を囑托せられ、ついで六月十九日、教授に補せられる。十月九日、文理大三階講義室で、日本文学談話会第一回例会を開く。この会は、斎藤・土井両先生を顧問とする、同好の士の集まりで、日本文学の共同探究を目的として発足したものである。

同二十三年(一九四八) 四十五歳

一月、広島県豊田郡忠海町(現在の竹原市忠海町)勝蓮寺井上義光老師会下の接心会にはじめて参する。八月、日本文学談話会の

機関雑誌「文学探光」をいつくし文庫より創刊。十月一日、広島教育図書刊行会より、中学生の投稿を中心とする雑誌「国語通信」(毎月二回刊行)が発刊されるに際し、松永信一・真川淳その他の諸氏とその編集に携わる。

同 二十四年(一九四九) 四十六歳

五月一日、広島教育図書刊行会より、「国語通信」の姉妹雑誌「こくご通信」(小学生版、毎月二回刊行)発刊、その編集にあずかる。八月三十一日、学制改革に伴い、広島大学教授兼広島大学広島師範学校教授に補せられ、東雲分校勤務を命ぜられる。

同 二十八年(一九五三) 五十歳

三月十二日、伊東静雄氏逝去。六月、齋藤先生都立大学教授に転任。

同 二十九年(一九五四) 五十一歳

十一月、伊東静雄詩碑がその郷里長崎県諫早市に建てられる。碑銘は「手にふるる野花はそれを摘み 花とみづからをささへつつ歩みを運べ」(詩集「夏花」より)、三好達治氏の筆になる。

同 三十年(一九五五) 五十二歳

三月、長女みを広島大学文学部国語国文学科卒業、二女あさ広島女子短期大学国文科卒業。

同 三十一年(一九五六年) 五十三歳

四月一日、教育学部勤務を命ぜられる。同月、広島市南千田町一〇三九に転居。十二月十九日、池田龜鑑先生逝去。この年、教室関係の学生に自殺者があらわれ、極度に心痛する。

同 三十二年(一九五七年) 五十四歳

十二月十五日、父亡き後一家の相談相手であった叔父山広民五郎死去。享年七十七歳。

同 三十三年(一九五八) 五十五歳

二月、長女みを辻景虎に嫁す。三月四日、三重大学教授山本修氏交通事故により急逝。学習院の旧同僚で、戦中戦後にかけて最も親交のあった人。

同 三十四年(一九五九) 五十六歳

三月、三女はる広島女学院大学英文学科卒業。七月、二女あさ吉野和照に嫁す。

同 三十五年(一九六〇) 五十七歳

丸山学氏が中心となり、熊本県植木町田原坂公園に蓮田善明文学碑が完成し、十月十九日には、その除幕式が行なわれ、栗山と共に参列。碑銘は「ふるさとの駅におりたち眺めたるかの薄紅葉忘れえなくに」(第二次大召時の遺稿歌集「おらびうた」より)、齋藤先生の筆になる。遺贈品一・太二・新夫の三君それぞれ立派に成人し、敏子夫人も健在、地下の墓も慰められたであろう。

同 三十六年(一九六一) 五十八歳

十一月十八日、学位請求論文「和泉式部歌集の研究」により、広島文理科大学より文学博士の学位を受ける。

同 三十七年(一九六二) 五十九歳

二月、広島県安佐郡高陽町矢口三五九一に転居。場所は太田河原、芸備線に沿う田舎町。三月、長男宏輔広島大学水産産学部水産学科卒業、富山県水産試験場に就職。

同 三十八年(一九六三) 六十歳

六月六日、還暦を迎える。